

## 第6章 アルバイトと奨学金

### 1. アルバイト行動

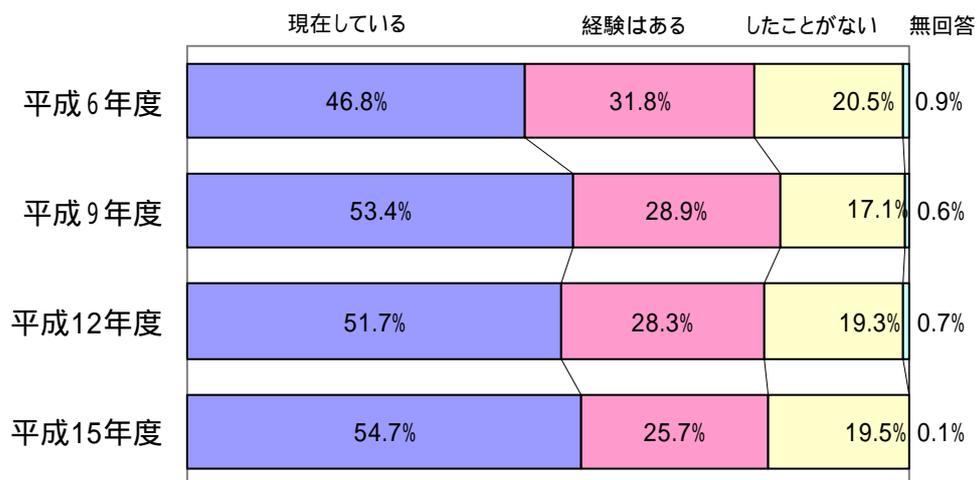
#### (1) アルバイト（定職を含む）経験の有無

アルバイト経験のある人は80%を超え、全学生の50%以上の学生が現在アルバイトをしている。

「現在アルバイトをしている」(54.7%)は前回調査時よりも3ポイント増加し、「現在はしていないが、したことがある」(25.7%)で、全学生の80%がアルバイトを経験している。

平成6年度からの経年変化をみると、現在アルバイトをしている学生の比率は、全体的にみてゆるやかに増加する傾向にある。

図6-1 アルバイト経験の有無の経年変化

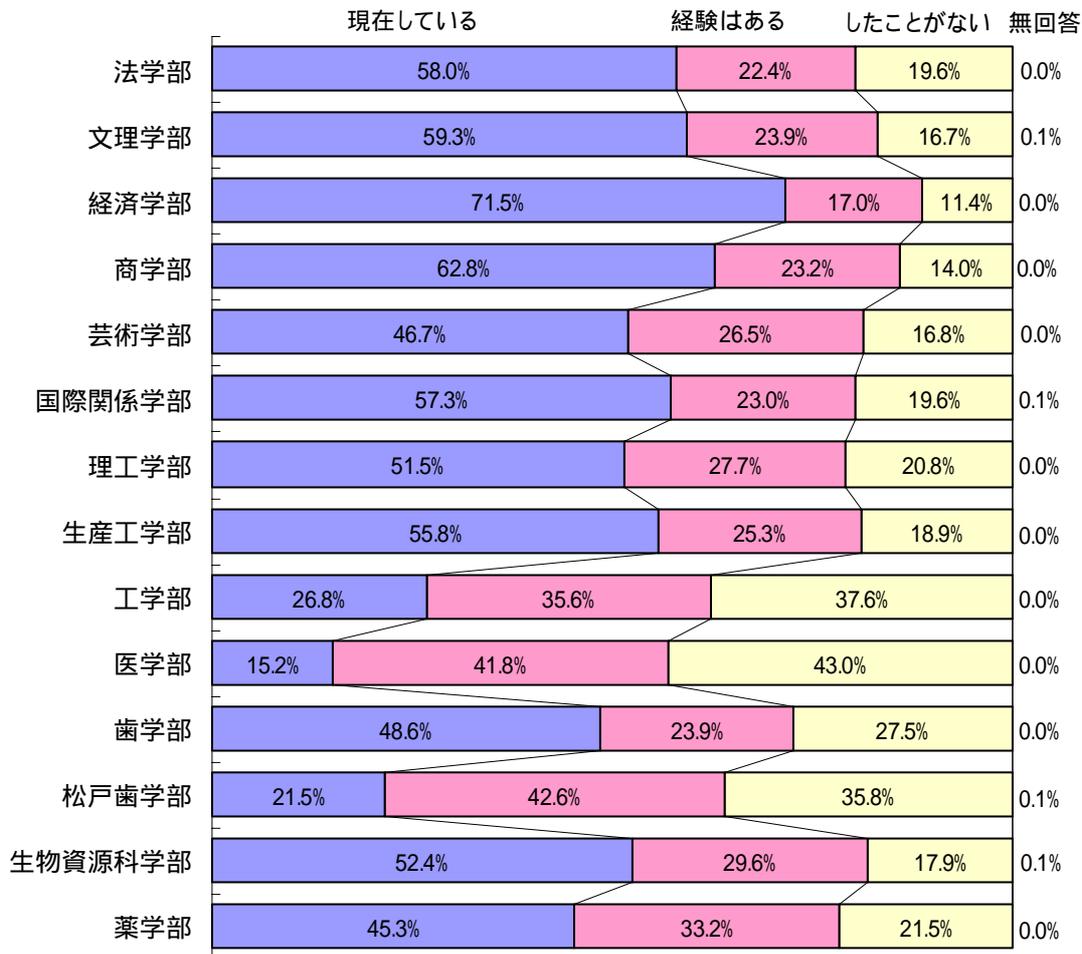


(2) 学部別アルバイト経験の有無

現在アルバイトをしている比率が高い学部は、商学部、経済学部であり、とくに、経済学部では70%以上の人アルバイトをしており、前回調査時点に比較して10%以上増加している。

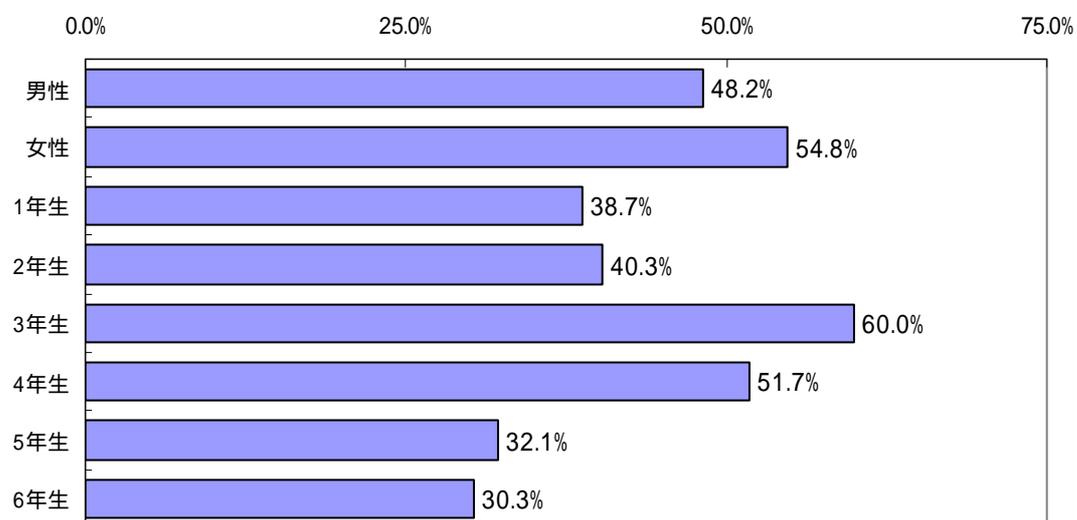
現在アルバイトをしているひとの比率は下図に示すとおりであるが、これらはいずれもアルバイトをしている学生が増加する結果となっている。(別添、学部別資料参照) 医学部(15.2%)、松戸歯学部(21.5%)では前回に比較してアルバイトをしている学生は少なくなっている。

図6-2 学部別アルバイト経験の有無



アルバイトをしている学生は、男子学生（48.2%）よりも女子学生（58.4%）の方が多く、学年では2年生（60.3%）、3年生（60.0%）、4年生（51.7%）で多くなっている。

図6-3 性別，学年別アルバイトをしている学生の比率



(3) アルバイトの実態とその目的・動機

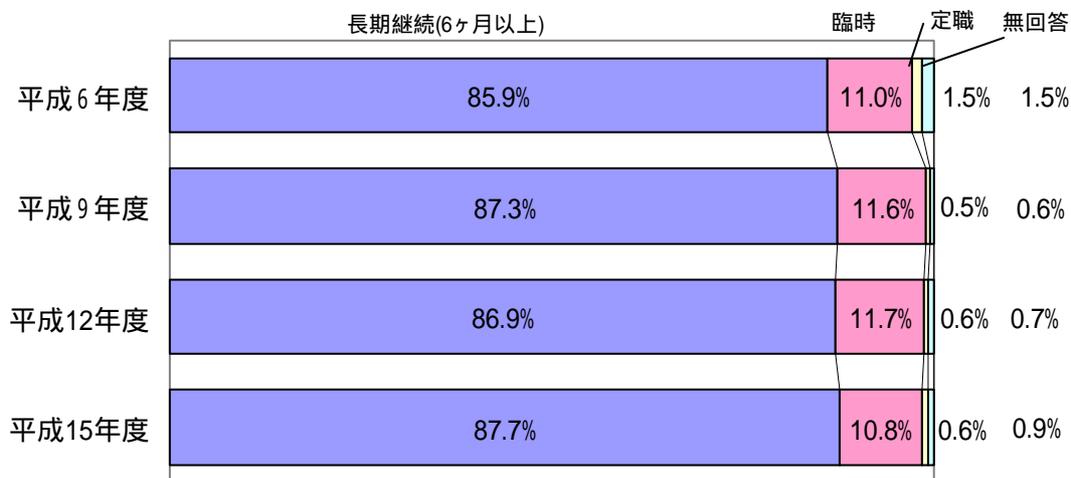
6カ月以上継続の長期アルバイトが圧倒的に多く、90%近くを占めている。

アルバイトの形態をみると、6カ月以上継続の長期アルバイトが87.7%と圧倒的に多く、6カ月未満の短期アルバイトは10.8%にとどまっている。

平成6年度から経年変化をみても、アルバイトの形態についての大きな変化はみられない。

平成15年度調査時点でアルバイトをしている学生は54.7%で、全学生実数に置きかえると約43,319人(79,194×0.547)となり、この中87.7%の学生(37,990人)が6カ月以上の長期アルバイトに従事していることになる。

図6-4 長期・臨時・定職の別に関する経年変化



アルバイトをする主な動機・目的は、「旅行・レジャー」から「生活費・食費のため」にシフトしている。

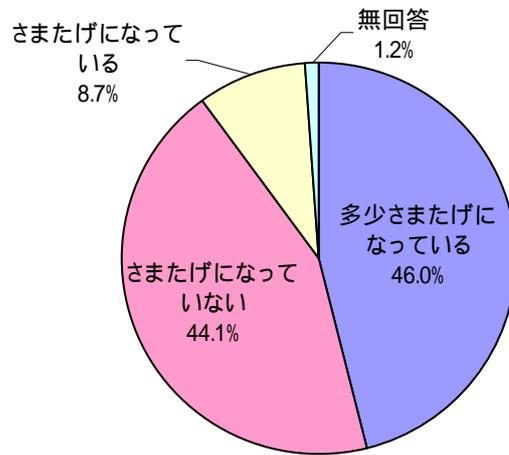
アルバイトをする主な動機・目的は、「旅行・交際・レジャー費のため」(29.9%)、「生活費・食費のため」(39.0%)および「衣服購入のため」(31.4%)が上位3項目で、「旅行・交際・レジャー費」が減少し、「生活費・食費」が増加している。おそらく経済の長期低迷がこうした結果に反映しているものと思われる。

表6-1 アルバイトの目的・動機の経年変化(2つまで選択)

	平成6年度	平成9年度	平成12年度	平成15年度
授業料・学費のため	8.3	7.1	7.6	10.9
食生活・食費のため	19.7	34.6	34.2	39.0
衣服購入のため	25.7	32.3	32.4	31.4
耐久消費財購入のため	11.4	9.4	7.4	4.7
旅行・交際・レジャーのため	52.7	43.9	36.4	29.9
クラブ活動費のため	12.9	9.8	6.7	7.3
学外の学校通いのため	2.5	2.4	2.0	1.9
自動車免許取得のため	3.1	3.5	3.4	4.4
借金返済のため	3.8	3.1	2.6	2.4
社会勉強のため	14.2	14.0	13.1	14.5
就職の準備のため	1.2	1.7	2.1	2.8
友人をつくる	4.4	3.3	3.9	2.1
友人等に頼まれて	1.3	1.0	1.3	0.8
貯蓄のため	16.4	13.5	13.1	15.1

アルバイトが勉学のさまたげになっているかどうかをたずねた結果、「多少さまたげになっている」と回答した学生が46.0%を占め、「さまたげになっていない」と回答した学生は44.1%であった。

図6-5 アルバイトは勉学のさまたげになっているか



## 2. 学生生活と奨学金

### (1) 家庭からの仕送りだけで修学は可能か

家庭からの仕送りだけで「修学可能」な学生は64.5%。

家庭からの仕送りだけでは「修学に不自由」すると回答した学生が23.0%、「修学を継続することが困難」と回答した学生が9.9%を占めている。仕送りだけで修学困難と回答した学生は、工学部（14.1%）が最も多く、経済（12.2%）、生産工学（11.9%）の順になっている。

図6-6 家庭からの仕送りだけで修学は可能か

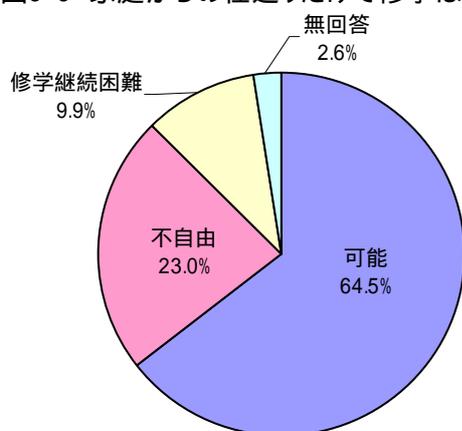
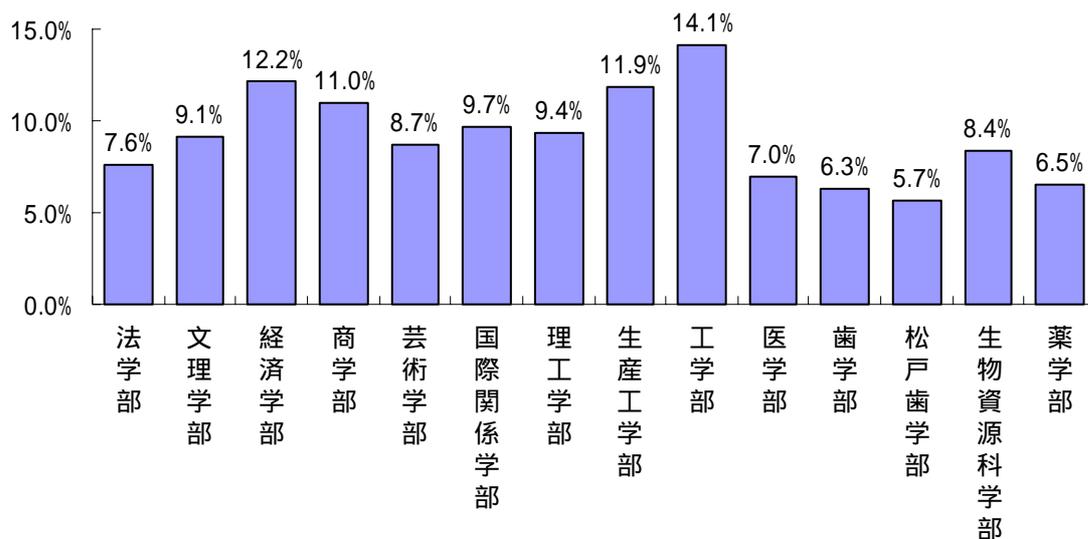


図6-7 学部別修学困難と回答した学生の比率



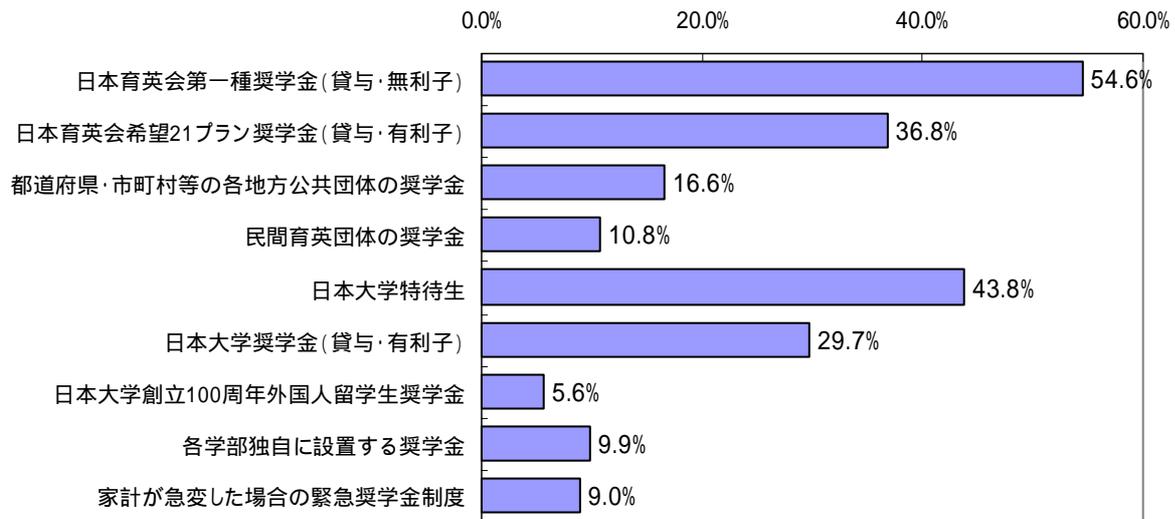
(2) 奨学金制度に対する認知度

奨学金制度に対する認知度が低い。

大学全体で最もよく知られている制度は、日本育英会の奨学金であり、「第一種（無利子）」に対して54.6%、「きぼう21プラン（有利子）」に対して36.8%が知っている。

しかし、地方公共団体の奨学金や、各学部独自の奨学金、家計支援のための緊急奨学金等を知っている学生は20%を大きく下回っている。

図6-8 奨学金制度に対する認知度(知っているもの全て)

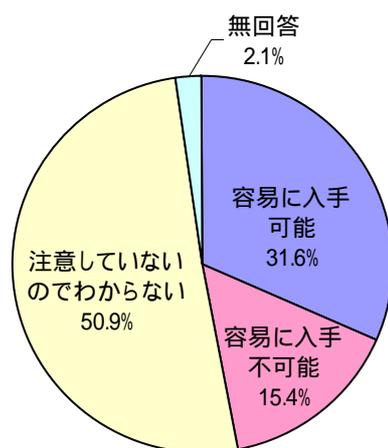


「奨学金」情報の伝達方法に工夫が必要

こうした奨学金に対する情報を容易に入手することができるかどうかをたずねた結果、「注意をしていないのでわからない」という学生が全体の50%を占め、「容易に入手できない」(15.4%)、反対に「容易に入手することができる」学生は全体の31.6%である。

全体の70%近くの学生が奨学金制度に関する情報とは疎遠な状態にあるといえる。

図6-9 奨学金情報の入手可能性



(3) 奨学金利用の有無と利用意向

全体の約50%が「利用の必要なし」、約30%の学生が給付あるいは貸与を希望。現在利用している学生は16.5%。

全体では「奨学金を申請する必要がある」学生が48.8%を占めている。現在「給付を受けている」学生が3.1%、「貸与を受けている」学生が13.4%で、合計16.5%の学生が奨学金制度を利用している。また、現在、給付あるいは貸与を申請中の学生が5.7%いる。

図6-10 奨学金の利用の有無と利用意向

